



 Data	2024-5
監督: 森谷司郎	
脚本: 橋本忍	
原作: 新田次郎『八甲田山死の彷徨』	
出演: 高倉健/北大路欣也/丹波哲郎/三國連太郎/栗原小巻	
/加山雄三/島田正吾/大滝秀治/藤岡琢也/小林桂樹/緒形拳/加賀まりこ/森田健作/秋吉久美子/浜田晃/神山繁/東野英心/江幡連/金尾鉄夫/高山浩平/古川義範	

👁️👁️ みどころ

北大路欣也の「天は我々を見放した」のセリフが一世を風靡した、1977年の名作を「橋本忍映画祭 2024」で再度鑑賞。北大路欣也はもとより、高倉健も若い！カッコ良い！そして、演出も脚本も素晴らしい！

八甲田山雪中行軍は遠足にあらず。来るべき日露戦争への備えのためだ。1901年当時の日本陸軍がそんな合理的な考えをしていたことが、新田次郎の原作『八甲田山死の彷徨』でも、司馬遼太郎の『坂の上の雲』でもよくわかる。本作の悪者(?)は三國連太郎演じる山田少佐だけだが、軍隊では指揮命令系統の混乱が致命傷になることを肝に銘じたい。

『坂の上の雲』中盤のハイライトは「奉天会戦」だが、そこで八甲田山雪中行軍の教訓は生かされたの？神田大尉(北大路欣也)は死亡したが、徳島大尉(高倉健)以下の面々と第五連隊で生還した倉田大尉(加山雄三)は、2年後の日露戦争の黒溝台会戦において零下20度の厳冬の中を戦い抜き、全員戦死。しかし、その犠牲は後の奉天会戦での日本軍の勝利に結びついたから、八甲田山での貢献は大きい。日本陸軍の歴史にこんなひとコマがあったことを、しっかり胸に刻みたい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■ 「橋本忍映画祭 2024」を開催！こりゃ必見！ ■□■

大阪を代表するミニシアターであるシネ・ヌーヴォは、2024年1月2日～2月9日、「生誕百五年・没後五年 橋本忍映画祭 2024」を開催した。そのチラシの表紙は次のとおりだ。

春日太一著「鬼の筆 戦後最大の脚本家・橋本忍の栄光と挫折」出版記念

社会派作品や傑作サスペンス、骨太なエンターテインメント作品から映画史上に残る超大ヒット作品まで、
日本映画の頂点ともいえる多彩な作品の脚本を手掛けてきた橋本忍。
日本を代表する脚本家・監督の代表作17作品一挙上映!

ある一人の浪人者の恨み節ッ!!
切腹の座につき、
今から切腹する。



生誕百五年・没後五年

橋本忍映画祭2024



日程：2024年1月2日(火・祝)
→2月9日(金) (6週間)
会場：シネ・ヌーヴォ (大塚・丸森)

黒澤明に「お前はバクチ打ちた
映画に対する賭博者だ」
と叫びつけた時
もつと思いついた
バクチ打ちになろうと思った
橋本忍

主催：日本映画全国上映実行委員会・ユナイテッド・シネマ 協賛：公益文化財団東京 協賛：大阪自由大学 協賛：東京、池田、日高、田原、橋本、アオノシマ、橋本忍の故郷

■□橋本忍の功績は？今回の上映作品は？■□

抜いた健さんもカッコいいが、日露戦争直前の日本陸軍大尉の正装をした健さんもカッコいい！

他方、オールスターを総動員した超大作、山本薩夫監督の『戦争と人間』(70～73年)は結局全3部のみで終わってしまったが、山本圭扮する標耕平と共に、東京帝国大学の学生、伍代俊介に扮したのが北大路欣也だった。標耕平は貧乏人の息子だから共產主義活動に走ったのも頷けるが、俊介は伍代財閥の次男坊だから、アカに染まるのは如何なもの・・・？しかも、学生の分際で、佐久間良子扮する人妻に恋心を抱くなどもってのほか。こりゃ下手すると姦通罪に・・・。

若き日の北大路欣也は、若き日の山本圭と共にそんな役がピッタリだった。しかし、それから数年後の本作に見る、北大路欣也扮する神田大尉は何とも洗練されているし、カッコいい。『戦争と人間』では、高橋英樹が、浅丘ルリ子扮する伍代財閥の長女伍代由紀子の恋人である陸軍大尉植進太郎役をカッコ良く演じていたが、日中戦争直前を描いた『戦争と人間』(『シネマ5』173頁)における高橋英樹と、日露戦争直前を描いた『八甲田山』における北大路欣也は、共にカッコいい青年将校の典型だ。

他方、彼らの上官役には三國連太郎、丹波哲郎、小林桂樹、大滝秀治等の演技達人な俳優が勢揃いしているが、問題は三國連太郎扮する山田正太郎少佐だ。軍隊の統率ある行動のためには、何よりも指揮命令系統の確立が不可欠だ。しかるに、雪中行軍本隊たる神田大尉率いる中隊編成の196名とは別に、大隊長の山田少佐率いる大隊本部14名が“随行”してくると、いつの間にか、その指揮命令系統に混乱が・・・。

■□■雪中行軍は遠足にあらず！その目的は？企画立案は？■□■

富士山は日本人なら誰でも知っている山だが、本作が大ヒットするまで、青森県に八甲田山があることを知っている日本人は少なかったはずだ。本作の原作は新田次郎の『八甲田山死の彷徨』だが、なぜ日本陸軍は死の彷徨になってしまったような、“雪中行軍”演習を必要としたの？兵隊の中には、これを遠足気分で楽しむ輩もいたようだが、雪中行軍は遠足にあらず！これは、数年後に必ず迎えるであろう零下数十度の満州の雪原における日本陸軍 vs ロシア陸軍の対決を見据えた日本陸軍の総力を挙げた壮大な演習なのだ。

本作は、1901(明治34)年10月、弘前第八師団の第四旅団本部で、旅団長の友田少将(島田正吾)と参謀長の中林大佐(大滝秀治)が、青森歩兵第五連隊と弘前歩兵第三十一連隊の連隊長以下を集めて八甲田の雪中行軍演習の必要性を訴えるシークエンスから始まる。そして、これを見れば、当時の日本陸軍の考え方がいかに合理的であったかがよくわかる。本作は新田次郎の『八甲田山死の彷徨』を原作とするものだが、私の大好きな司馬遼太郎の『坂の上の雲』(68～72年)で描かれた日露戦争直前の日本の健全さにも通じるものがある。ウィキペディアの「あらすじ」はそのことについて、次のとおり解説している。すなわち、

そこで課題として参謀長が挙げたのは寒地装備と寒地訓練の不足であった。相手は零下 40 度の雪原でも闘えるロシア軍であり、日本軍にはそのような経験が無いので、極寒対策や雪中行軍の注意点及び装備品の研究を行うために厳冬の八甲田山を行軍して調査を実施するものであった。加えて陸奥湾と津軽海峡がロシア軍により封鎖・占拠され、青森と八戸・弘前を結ぶ沿岸交通路が艦砲射撃被害などで万一断たれた場合は内陸の八甲田山系がそれらを結ぶ唯一の経路となるが、当時は「積雪量の多い八甲田が冬期間物資輸送経路にできるか否か未知数」だったため、「八甲田が冬でも物資輸送経路として使えるか否かを試す」意味もあった。

なるほど、なるほど。

他方、旅団長の友田少将から「二人とも雪の八甲田を歩いてみたいとは思わないか」と提案されると、本作の主人公となる神田大尉と徳島大尉の 2 人が、「これは実質的な命令だ」と受け止めざるを得なかったのも仕方ない。本作では、そんな「曖昧さ」を含めて、軍の指揮命令系統にさまざまな欠陥があったことを 1 つの要因として、結局、八甲田では神田大尉の死亡を含む大きな犠牲を出すことになってしまうので、その因果関係に注目！しかし、その失敗を含めて八甲田山雪中行軍の成果が大きかったことは、後の日露戦争の国黒溝台会戦における零下 20 度の厳冬の中を戦いの中で、全員戦死したものの、その犠牲が後の奉天会戦での日本軍の勝利に結びついたことを見れば、明らかだ。

■□■山田少佐の傲慢さが諸悪の原因！秋吉久美子にも注目！■□■

明治維新の結果成立した“近代国家日本”の陸軍は、膨大な人・モノ・カネを備えた巨大な組織だから、「上官の命令には絶対服従」をはじめ、さまざまな軍規（＝原理・原則）があった。それが合理的に運営、執行されれば問題はないが、陸軍だってしょせん人間の集団である以上、そこにさまざまな問題、混乱が生じるのが常だ。本作でそれを象徴する（一手に引き受ける）のが、三國連太郎演じる山田少佐だが、北大路欣也演じる神田大尉も少し遠慮しすぎの感がある。日本陸軍では「上官の命令は絶対」と同時に「意見具申の自由」も一定程度は保障されていたはずだ。それを考えれば、山田少佐率いる大隊本部が随行すること自体に神田大尉が異議を唱え、「それでは指揮命令系統が乱れる危険が強い」と意見具申していたら、小林桂樹演じる津村中佐はそれを採用していたのでは？

また、「1 月の八甲田は恐ろしい」と語っている住民（＝民間人）の声を神田大尉も徳島大尉も素直に聞いていたが、「軍は何でもできる」と思い込んでいる山田少佐だけは、「地図と磁石があれば民間人の道案内など不要！」とやってのけていたから、その傲慢さにはアレレ、アレレ……。道案内のために民間人に払う費用は陸軍の経費として計上できるはずで、別に山田少佐の財布から出すわけでもないのだから、合理的かつ必要な経費はケチることなく使わなければ……。

青森方面から出発する神田隊と反対に、弘前方面から出発する徳島隊は地元の民間人で、しかも女性の道案内人である滝口さわ（秋吉久美子）にも敬意を持って接していたから、

あの雪吹雪の中を無事目的地向かって歩くことができたが、地元住民の案内を拒んだ山田少佐とそれに従った神田隊は目的地までわずか2キロまで迫りながら、進路を見失ったため、惨憺たる結果を招くことになってしまった。「情報の大切さ」はスマホ社会、IT社会の今は誰でもわかっているし、逆に情報過多の弊害が語られているほどだが、零下数十度の猛吹雪の八甲田山を雪中行軍にするについては、道案内をはじめとする多くの情報収集に努めなければ……。その点、山田少佐のバカさ加減にはうんざり。そして、そのとぼっちを受けて遭難してしまった神田大尉以下には、大いに同情……。

■□■八甲田山にも緑の草木が！村山伍長の生き残り策は？■□■

169分の長尺となった本作のほとんどの舞台は、吹雪の八甲田山を歩き回る神田大尉や徳島大尉たちの部隊の姿だが、時々、緑の草木に覆われ、美しい小川が流れる八甲田の姿が登場する。ハイライトシーンの中でさえ時に登場するその姿は、雪の中で凍えそうになる身体と絶望する気持ちを奮い立たせるために、神田大尉が頭の中で思い浮かべている春夏秋の八甲田山の風景だ。そう、1月の八甲田は恐ろしい山だが、春夏秋の八甲田は美しい山なのだ。神田大尉はそれをよく知っていたが、上層部からの“命令”となれば、それを受けざるを得ないのは仕方ない。また、彼は中隊長だからその軍務が大変なものも仕方ない。もともと、その見返りとして、中隊長には身辺の世話をする当番兵がつき、自宅できつろぐときは当番兵が焚く風呂にゆっくり入れるのだから、嬉しいといえば嬉しいが……。

そんな中隊長に比べれば、伍長の軍務は楽だ。緒形拳は1965年のNHK大河ドラマ『太閤記』に、サルに似ているため秀吉役に起用された俳優だが、本作が公開された1977年時点では高倉健や北大路欣也に比べればその格の差は明らかだった。したがって、本作で彼が演じた村山伍長役は、まさにその時期の彼にピッタリだ。それはともかく、本作で面白いのは、神田隊の伍長として八甲田雪中行軍に参加した村山伍長は、地元で育ち八甲田山の山道をよく知っているため、本隊が立ち往生していることを知ると、「このまま命令に従って進んでいけば全員遭難し、死なばもろともになってしまう」と判断し、「俺は自分の信じる道を行く！」という判断を下し、その行動を取ったことだ。これは典型的な命令違反、軍規違反だから、本来“軍法会議”モノだが、さて、彼はどうなったの？本作ラストでは、日露戦争が終わり平和な時代が訪れ、青森ねぶた祭りの歓声に沸く頃、杖をつきながらロープウェーに乗る老いた村山伍長が、草木に覆われた穏やかな景色の中、八甲田山系の山々を見つめている風景が登場するので、それに注目！なぜ彼が軍法会議にかけられなかったのかは不明だが、あの時代の日本陸軍の中に村山伍長のような（ユニークな）男がいたことにも注目したい。

2024（令和6）年1月17日記